

〔目的・方法〕 昭和43年度20才であった青春期女子70名につき、53年度30才の成年期に達した時点で、既報の「嗜好指数」を用いて、その酒類嗜好性の変化を追及した。

〔結果〕 1) 20才当時では、総じて酒類を嫌う者およびその好みが明らかでない者が、甘/酸比・甘/塩比のいかんを問わず多く見られた。

2) しかし、酒類を好む者は甘/酸比・甘/塩比における「酸味好き」・「塩味好き」にわずかに多く、嫌う者は両比とも「甘味好き」にやや多く認められた。

3) これに対し10年後30才の時点では、両比を通じて酒類を好む者が増加した。

4) とくに、酒類を好む者は甘/酸比における「酸味好き」に多く、甘/塩比における「甘味好き」・「塩味好き」間には意外に差異を認めなかった。

5) また、酒類を嫌う者は甘/酸比における「甘味好き」に多く、甘/塩比においては、「甘味好き」・「塩味好き」間にほとんど差異が見られなかった。

6) 以上により、常識的な甘/塩比よりも甘/酸比のほうが酒類嗜好度に関する有力な指標となることが見いだされた。

7) なお、20才時の「酸味好き」者は、30才時には多く「塩味好き」に移行しており、この現象と酒嗜好の上昇現象との関係が注目される。